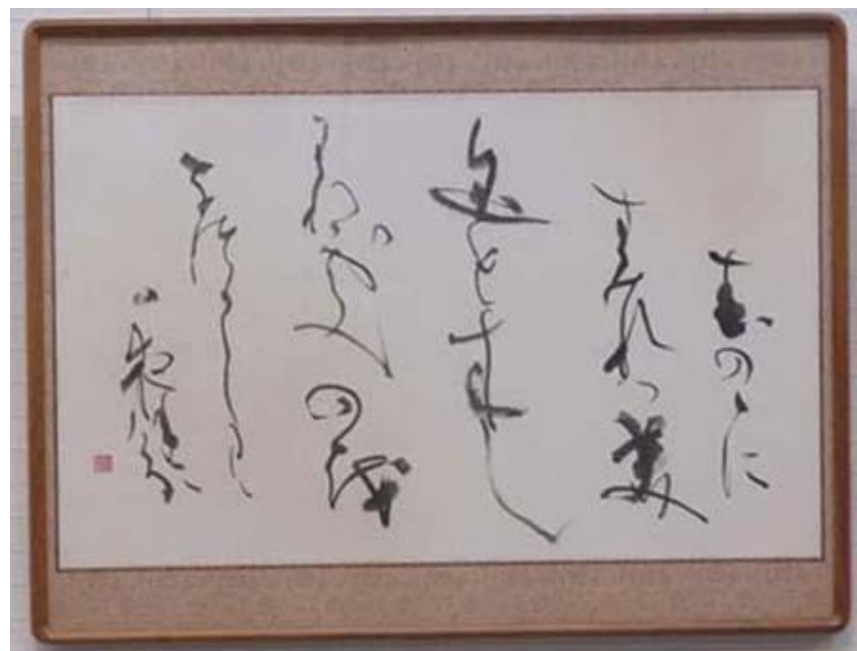


第十八回 千葉県書作家連盟展から

雄渾と美しさと

平成四年に始まった千葉県書作家連盟展は十八回を迎えた。安孫子、柏、流山の書作家の百余人の中から知人の二氏の作品を呆然と眺め、いい機会である、と、その書の意図するところを聞いた。聞いた。パソコン慣れた者には、深遠な世界の広がり、畏敬の念にとらわれる。しかし、日本語である。挑戦しよう。

(第十八回 千葉県書作家連盟展は、四月十四日―十八日、さわやか県民プラザで開催された)



上掲は、柏の井出綯翠さんのかな書き万葉集で、山部宿禰赤人(やまべのすくねあかひと)の一首。(八・四二八)春の野にすみれ摘みにと来し我れぞ野をなつかしみ一夜寝にける

とても赤人を思いつかないが、二行目の「すみれ」に気がつけば、赤人に追いつく。
井出さんは、こう書いているのである。

縦横無尽の筆遣いだ。



山田海石さんは、広島に原爆が落とされた日、兵士として勤務していた。久しく我孫子の被爆者の会の運営に尽力された。ことしは8月24日に手賀沼公園・平和の記念碑前で式典。

かななどない男性的な漢字ばかり。墨場必携』から、徳如海寿似山」。徳は海の如く寿は山に似たりと読む。その徳は海の如く広く、山の如く高く長久である「聖人のことか、人間のあるべき姿か。

書を書かれたのは、我孫子の山田海石さん。この書作家連盟展の委員長だ。三字目の「海」の字に山田さんの思い入れがある。空海が最澄に送った手紙(風信帖)に、空海は海を「毎水」を一字としていたためているのだ。